

令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市等名

大阪府

学校名

大東市立大東中学校

人権課題

女性

対象学年・
取り扱った教科等1,3学年・総合的な
学習の時間

時数等

2-3時間

目標・人権教育のねらい

家族の生活のあり方を考えることを通して、互いの立場や役割について理解し、よりよい関係性を築く考えを持つことができる。

実施した内容

- 1年：家庭生活を支える仕事はどこでどのように行われているか考える。
- ・日本と外国の家庭内での役割分担について知る（1時間）
 - ・日本のジェンダーの特徴、よりよい形について話し合う（1時間）
- 3年：様々な家族の形態や人数があることを理解し、それぞれの形に応じた役割を考え、より良い関係を築くことを考える。
- ・家庭内のシチュエーションでのロールプレイング（1時間）
 - ・より良いジェンダーの関係性について話し合う（2時間）

工夫した点

- 1年：妻と夫が「家事と家族のケア」・「仕事と仕事での移動」に費やす1日当たりの時間の国際比較から、日本の特徴について話し合いの機会を設けた。
- 3年：アニメを参考にした家族の形を設定し、様々な事象を想定したロールプレイングを行うことで、家族内のそれぞれの立場で一人ひとりの気持ちを考えることができるように、より良い関係を築くことについて話し合いの機会を設けた。

令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・技術・家庭科の学習内容と関連が強いため、家族や家庭について学ぶ時期に合わせて、総合的な学習の時間に学習活動を拡張する形で実践した。
- ・近隣のこども園での保育体験を行い、育児に関連する体験をできるようにしている。

事業成果

- ・知識的側面「学校や地域社会の中で、差別があると思いますか」
授業開始時54%→授業終了時60%
「日本は、ほかの国に比べて夫の働く時間が多く、妻が家事や家族のケアをほとんどしていることが多いと分かった。」など、資料を基に、女性に家庭の仕事が偏っている現状を学ぶ様子が見られた。学習を進める中で少しずつ差別に気づける生徒が増えた。
- ・価値・態度的側面「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」
授業開始時60%→授業終了時70%
「母親の立場で、家事の分担を考えることができた。ロールプレイングでセリフを考えるときに、なんと言い出せばいいか難しく感じた。」という母親を思いやるふりかえりがあり、自然と母親に役割を任せすぎていることに気づいた生徒がいた。他者の立場を考えて、自分にできることを考える様子が見られた。
- ・技能的側面「自分は学校の誰かの役に立っている」
授業開始時63%→授業終了間近68%
同じ役割に見えても、人により感じ方の違いに気づく様子が見られた。「自分が平等だと思ってもそう感じない人もいる。様々な感じ方がある。」ことを理解したうえで関係を調整しようとする姿が見られた。関係調整力を高められたと実感することで、自己有用感の高まりがみられた。

令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市等名

大阪府

学校名

大東市立大東中学校

人権課題

障害者

対象学年・
取り扱った教科等1学年・総合的な
学習の時間

時数等

3時間

目標・人権教育のねらい

- ・同じ出来事でも、嫌だと感じる程度には人によって違いがあることを理解する。
- ・自分では意図せず、人が嫌だと感じることをしている場合があることに気づく。
- ・人によって得意不得意分野があることを知り、自分はいろいろな人にどう対応していくかを考える。

実施した内容

- ・人によって嫌だと感じる程度には違いがあることを体験する。（1時間）
- ・自分では意識していなくても、人の嫌がることをしていることがあることに気づく。（1時間）
- ・人によって得意・不得意な分野が異なることを知る。（1時間）

工夫した点

- ・集団づくりと関連させて、障がい個性のひとつと考えられるように、コグナイティブトレーニング（コグトレ：認知能力強化トレーニング）をとり入れた体験的な教材を利用し、各個人にもそれぞれ得意分野や苦手分野があることを共有し、共感できるような授業展開を行った。
- ・相手の気持ちを考えないで、無理にコミュニケーションをとろうとする生徒に対して、相手の気持ちを自分事として考えられるような授業展開を行った。例えば、「誰とどんな距離で接するのが安心できるか」、「困っている人に自分ができることは何か」などを考えられるようにした。

令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

(英語科) 車椅子バスケットボールを取り扱った単元があり、同時期にパラリンピックや心のバリアフリーについて学習した。

事業成果

- ・ 知識的側面「学校や地域社会の中で、差別があると思いますか。」
授業開始時46%→授業終了時60%
今まで漠然と考えていたことが差別につながるかもしれないと気づけるようになった生徒が増えた。
- ・ 価値的・態度的側面「今の自分が好き。」
授業開始時65%→授業終了時70%
なかなか自信を持てなかった生徒が人権学習を通じて前向きな言動が増えた。
- ・ 技能的側面「自分は学校の誰かの役に立っている。」
授業開始時65%→授業終了時70%
クラスメイトや学年のために自分の役割分担に自信を持って取り組めるようになったり、今まで取り組んだことのない委員会や生徒会活動に立候補したりする生徒が増えた。

令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市等名

大阪府

学校名

大東市立大東中学校

人権課題

同和問題

対象学年・
取り扱った教科等2,3 学年・総合的
な学習の時間

時数等

3 時間

目標・人権教育のねらい

- ・同和問題（部落差別）についての学習を深め、差別を見抜く力を養い、様々な人権問題の解決のために行動することの大切さを学ぶ。

実施した内容

2 年： 職場体験学習の中で履歴書の学習後、社用紙の問題点に気づけるようにし、差別に立ち向かい統一応募用紙を作っていた経緯等について学ぶ。（3 時間）

3 年： 面接練習を通して違反質問等について学び、適切な対応を考える。（3 時間）

工夫した点

- ・実際に差別的な社用紙や違反質問を体験し、問題点を話し合うことで、その差別性に対する気づきを生徒が共有することができた。
- ・同和問題の概要だけでなく、実際に結婚差別等を経験した方のインタビュー内容を教職員から丁寧に伝え、生徒にとって少しでも身近な問題として捉えられるようにした。
- ・面接練習の中で回答する必要のない質問をされる体験をすることで、その差別性に気づけるようにし、適切な回答の仕方などをロールプレイをとおして学び、実践的行動力や人権意識の向上をめざした。

令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

(指導上の工夫)
社会科の授業の中で、様々な差別について学ぶ機会を設け、それぞれの機会に合わせて、総合的な学習の時間に学習活動を関連付けて実践した。
(地域や関係機関との連携)
担当教職員が市内の人権文化センターに行き、センターの職員からインタビューを行った。

事業成果

- ・ 知識的側面「学校や地域社会の中で、差別があると思いますか。」
授業開始時53%→授業終了時56%
履歴書や社用紙の学習の中で、「なぜこんなことを聞く必要があるのかと思うような質問がいくつもあった。」や「出身地域などで就職が左右されることがあるなんて考えられない。」など知らないことに気付く様子が見られ、学習を進める中で少しずつ差別に気づける生徒が増えていると感じている。
- ・ 価値・態度的側面「今の自分が好き。」
授業開始時65%→授業終了時69%
「面接練習をされていて、自分の自信のあることだったら堂々と答えることができた」や「今まで自分がどんなことをしてきたかをふりかえることができて、もっといろいろなことに挑戦していきたいと思った」などの意見があり、自分自身に改めて興味・関心を持ち、これから様々なことに取り組んでいこうとする様子を感じられた。
- ・ 技能的側面「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」
授業開始時64%→授業終了時66%
「正しい質問・正しくない質問を学び、答えたくないことには答えなくていいということを知った。」とふりかえる生徒がいて、実際に自分事として捉え、どうしたらいいかを丁寧に考える姿が見られた。

令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市等名

大阪府

学校名

大東市立大東中学校

人権課題

外国人

対象学年・
取り扱った教科等全学年・総合的な
学習の時間

時数等

7-12時間

目標・人権教育のねらい

- ・ 1年：私たちと異なる文化を知り、それについて大切に・尊重する態度を身につける。
- ・ 2年：「プラグマティズム」の考え方に基づいて、「一人ひとりのいのちが輝く自分たちができること」を考えることができる。
- ・ 3年：すべての生徒が国籍やルーツを互いに認め合い、安心して生活できる環境をつくるためにできることを提案する。

実施した内容

- 1年：1人1か国を選び、その国の文化や暮らしについて調べてポスターにまとめる。(7時間)
- 2年：「ゲストティーチャーが取り組んできた社会活動やその理念」を聞いて、様々なルーツのある人で構成される社会をよくするために、自分に何ができるかを考える。(12時間)
- 3年：「どうすれば、国籍やルーツを互いに認め合って、安全で安心して学び過ごせる学校や社会になるか」を提案する。(8時間)

工夫した点

- ・ 表面的な学習に終わらないようにするために、探究する活動を核とした指導計画を立てた。
- ・ 1年生では、インターネットだけではなく、書籍等から確実な情報を得ることなど、調べ方を中心に指導した。
- ・ 2年生では、調べたり考えたりしたアイデアを動画に収録し、質疑応答を重点的に行い深く調べる力や考える力を育てた。
- ・ 3年生では、伝える相手を意識した発表の仕方を学び、充実した内容を伝えられるように、発表の技能を向上させた。3年間の学習をふまえ、人に伝える力を磨きながら、考えを洗練させていけるようにした。活動の中で生まれる対話を通して、考えが深まるようにした。
- ・ 外国にルーツのある方を講師（大学教員）として招き、差別を受けた体験などを生徒に伝えていただく機会を設定した。

令和6年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

英語科で、様々な国との文化の違いを積極的に扱うことで、「違いを楽しむ」素地を育んだ。社会科（地理的分野）で、様々な国の生活に触れたり、公民的分野で、憲法の本質とともに制度として人権を守る仕組みを学習したりした。

事業成果

- ・ 知識的側面 「学校や地域社会の中で、差別があると思いますか」
授業開始時48%→授業終了時51%
「日本に来て間もない外国からの移住者が、日本で暮らしていて、地震が起こったらどうしてよいかわからないからとても怖いだろうと思った。同じ社会にいても平等でない面があることを知った。」など、ルーツが異なれば同じ社会でも生きる難しさが異なることを理解する様子が見られた。背景や立場の違いから外国人が差別を感じることを理解する生徒が増えた。
- ・ 価値・態度的側面 「自分のまわりでは、基本的な人権が尊重されていると思いますか」
授業開始時10%→授業終了時15% 【※否定的回答】
「これまで意識が薄かったこと（無関心）に対して、主体的に考えるようになった。」
「尊重されているか、そうでないかを判断するよう意識を持つことが大切だ。」と考える生徒が増えた。異なる文化的背景のある人がどのように感じるかを掘り下げて考えられるようになった。多様な人たちが生活する集団の中で起きる諸問題に対する解決策について、自分事として身の回りの社会についてより深く考えられたことで、今の社会は基本的人権が尊重されているのか、生徒は考えを深めようとしていた。
- ・ 技能的側面 「自分は学校の誰かの役に立っている」
授業開始時60%→授業終了時70%
中国にルーツのある生徒が、母語でのプレゼンテーションを行うなど、単に考えを伝えるだけでなく、どのように伝えればよいか工夫を凝らす生徒の姿が見られた。

令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市等名

大阪府

学校名

大東市立大東中学校

人権課題

性的指向・性自認
(命の学習)

対象学年・
取り扱った教科等

1,3 学年・総合的
な学習の時間

時数等

3 時間

目標・人権教育のねらい

- ・自分と他人の「性」について正しい知識を理解し、多様な「性」の在り方について学ぶ。
- ・自他ともにかげがえのない「命」が、周囲の協力で育まれることを理解し、生命誕生について尊ぶことができる。命の誕生について正しく理解する。

実施した内容

- 1 年：生命誕生について、クイズやゲストティーチャーからの講話、抱っこ体験等から、命の大切さについて学び、マタニティマーク等の取組みについて考える。（3 時間）
- 3 年：性的同意・命の大切さについて、助産師等からの話を聞き、理解を深めるとともに、相談することの大切さについて考える。また、性自認について多様な在り方があることに気付く。（3 時間）

工夫した点

- ・赤ちゃん抱っこ体験や妊婦体験を通して、生命の大切さ、周囲の支えなく一人では成長できないこと等について、主体的に考える時間を設けた。（1 年）
- ・道徳の「ベビーカー論争」と関連させて学習することで、多様な立場に立ち、周囲の協力で命を守っていくことの大切さについて考えられるようにした。
- ・出前授業としてゲストティーチャーを招いて、実際に体験や経験した話を聞きながら、命の大切さと、多様な性のあり方を尊重することについて学ぶ機会を設けた。（1 年（元養護教諭・学校支援員）、3 年（助産師））

令和 6 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

(他教科との関連)

道徳の授業で「ベビーカー論争」を活用し、自分たちに何ができるかについて考えた。

(地域や関係機関との連携)

3年では助産師さんを招き、1年では本校の学校支援員から「戦争体験」から「命の大切さ」に関連して出前授業をおこなった。

事業成果

- ・ 知識的側面「学校や地域社会の中で、差別があると思いますか」

授業開始時46% → 授業終了時60%

「妊婦さんは、お腹が大きくなると真下が見えなくなるから歩くのが大変」や「ベビーカーを使っている人の様々な苦労について初めて知った」などがあり、自分の親や未来のこと、自分の周りの社会を想像しながら興味・関心を持つ生徒が増えた。

- ・ 価値的・態度的側面「自分は学校の誰かの役に立っている」

授業開始時65% → 授業終了時69%

「妊婦体験をしてみて前が見にくくて歩くのが怖かったので、もし妊婦さんを見かけたら手伝ってあげたいと思った」や「抱っこの仕方がひじを使うなどすれば上手にできる事を知った」などの意見があり、周りの人に対して自分に何ができるかを考えることができた。

- ・ 技能的側面「今の自分が好き」

授業開始時65% → 授業終了時69%

「自分が生まれてくるまでにたくさんの人々がいて、その中の一人が欠けただけで自分が存在しなくなることがわかりました。」などの意見があり、自分という存在がすばらしいことだということに気づくことができた。